

坪倉正治教授（放射線健康管理学講座）の課外授業 大学院セミナー開催

課外授業誕生のきっかけ

放射線健康管理学講座の坪倉正治主任教授が、10月14日を皮切りに「ムーミン先生と課外授業」と題して、3回にわたり大学院セミナーを開催しています。

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故や、それ以降も続く大きな災害、さらには新型コロナウイルス感染症の拡大などは医療にどのような影響を及ぼしているのでしょうか。その影響を知り、対策を考えるためには、単に医学・医療に関する知見はもちろん、経済やメディア・法律・ITなど、他の領域の方々の知見や考え方を知ることがとても大切であるとの考

えから、この課外授業が誕生しました。坪倉主任教授ご自身、医師になってから知らず知らずのうちに医療に特化した考え方をするようになり、その考えを優先してしまう傾向が強くなってしまっていると感じることが多くなっていたそうです。

他ジャンルの専門家の考え方を学び 自身の知見を拡げ考え方を深める

そこで、このセミナーでは通常の業務の中では関連が少ないジャンルを専門とする専門家を講師としてお招きし、医療を取り巻く多彩な人々や、その分野特有の考え方・物事の捉え方を知り、自身の知見を拡げ、考え方をより深め

ることを目的としました。セミナーの最後に必ず設けられている講師と参加者のディスカッションでは、大学院生はもちろん、参加している教職員の皆さんも交えた熱心なやり取りが行われるのも特筆すべき点です。



大学院セミナー（課外授業）案内

第1回目（10月14日開催）

元財務事務次官佐藤慎一様を講師にお迎えし開催。東日本大震災からの復興の取り組み、そこから得られる教訓などについて財務官僚の観点から講義いただきました。

国民全体が共有すべき、復興のための「復興構想7原則」を提案した経緯や、復興交付金を未来の国民への負担にするのではなく、震災から生き残った現代の国民で負担する方針を詳しく解説していただきました。特に「災害はその地域だけの問題ではなく、国民全体の課題であり、「今を生きる世代」としての責任である」という考え方が、被災地福島に住む私たちの心に強く響く講義となりました。



大学院生に交じって教職員も参加

第2回目（11月18日開催）

前回は大好評だったことから、同じく元財務事務次官佐藤慎一様を講師にお迎えしました。第2回の講演テーマは「コロナショックにどう向き合ってきたか、どう向き合うべきであったか」でした。コロナに向き合うためのキーワードを安心・人間らしい普通の日常生活・持続可能性・いかなるウイルスとも共生できる経済社会システム・国に対する信頼の5つとし、どうすれば、ウイルスに感染せずにすむのかではなく、どうコロナと向き合っていくべきかを経済視点からお話いただきました。感染拡大防止と経済の両立が議論される中、とても有意義な講義となりました。



メディア取材も入った第2回目

第3回目（11月25日開催）

講師にNHK前橋放送局のチーフディレクター八重樫伊知郎様及びアナウンサー川崎寛司様をお迎えし開催。八重樫様からはメディアとして震災と原発事故をどう伝えてきたかまた10年を前に何を伝えていくか？川崎様からは原発事故のメカニズムをはじめ、何を県民、全国、世界に発信をしたか？を講演いただきました。震災時の映像を用いて報道の視点・考え方を詳しく知ることができました。東日本大震災の教訓をもとに、災害時の報道は状況説明だけではなく「命を守る行動をとってください」などを付け加えるようになった事実を例に、災害情報の在り方について活発な議論が行われました。



NHK独自映像を用いた講義風景

今後の予定

今後の本セミナーでは、統合幕僚学校国際平和協力センター長近藤力也様や和歌山県立医科大学法医学講座近藤稔和教授を講師にお招きする予定です。その他にも医療分野はもちろん、行政、法律、経済、経営な

り多様なジャンルの専門家をお招きすることを検討しています。月1～2回、水曜日の18：00～19：30開催を予定しており、大学院生ではない方でも興味のある方であれば誰でもご参加いただけます。

今後のご案内をデスクネットの大学院セミナー予定表に随時掲載していく予定です。ぜひ一度ご参加されてみてはいかがでしょうか。

第62回日本小児血液・がん学会学術集会など 三団体合同公開シンポジウム(市民公開講座) オンデマンド配信

本学附属病院 小児腫瘍内科 菊田敦教授が会長を務める「第62回日本小児血液・がん学会学術集会」及び本学 看護学部生命科学部門 古橋知子准教授が会長を務める「第18回日

本小児がん看護学会学術集会」が新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、WEB開催されました。また、公益財団法人がんの子どもを守る会との三団体合同公開シンポジウム

（市民公開講座）は12月初旬よりオンデマンド配信いたします。こちらは一般の方々の聴講が可能です。この機会にぜひ聴講ください。

【学術集会概要】

本学術集会は、再発や難治性となった小児がんに焦点を当て、このような患者、家族、治療に携わる医療者

の夢や思いが少しでも形にできるよう、国内外の新しい取り組みと成果を発表していただき、共に議論し、

考える機会となり、福島の復興にも繋がることを目的に開催いたしました。

三団体合同公開シンポジウム(市民公開講座)概要

■主催

第62回日本小児血液・がん学会学術集会
第18回日本小児がん看護学会学術集会
第25回公益財団法人がんの子どもを守る会

■テーマ

「造血細胞移植後の生活」（菊田教授が座長を務められ開催）

■オンデマンドで視聴可能期間

12月初旬～12月18日（金）まで視聴可

■配信サイトURL

<https://www.c-linkage.co.jp/jspho2020/joint-symposium.html>（準備中）

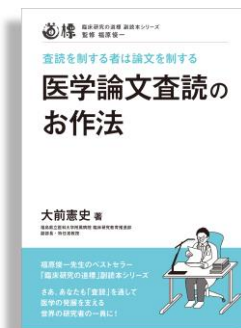
大平哲也教授（疫学講座）が 一般向け健康書籍を刊行

震災後の福島の県民健康調査により、福島県ではストレスの影響により「うつ」が増えたことや、肥満や高血圧、糖尿病といった生活習慣病全般が増加傾向にあることが分かってきました。加えて、現在は、長期化するコロナ禍で不安やストレスにも私たちは晒されています。こういった「負の感情」は、心の病気だけでなく、高血圧や糖尿病といった生活習慣病を引き起こす要因にもなることがさまざまな研究データからわかってきました。

先行き不透明で精神的にも不安定になりがちなウィズコロナ時代、「負の感情」に振り回されて病気になる前に感情とうまく付き合っていくにはどうすればよいのでしょうか。そのような「負の感情」を“毒”にしないためには、心ではなく行動を変えることがポイントとなることを、疫学講座の大平哲也主任教授が著書『感情を“毒”にしないコツ』（青春出版社）で分かりやすく解説しています。ぜひ書店で手に取ってみてください。



本学附属病院 大前特任准教授（臨床研究教育推進部）が 『医学論文査読のお作法 査読を制する者は論文を制する』を刊行



本学福原俊一副学長のベストセラー『臨床研究の道標』副読本シリーズ第一号として、臨床研究教育推進部副部長の大前特任准教授が、書籍『医学論文査読のお作法 査読を制する者は論文を制する』（認定NPO法人 健康医療評価研究機構）を刊行されました。

「査読」は、医学研究の新たな発見が世に出、さらには確固たるエビデンスとして受け入れられるために必ず通らなければいけないプロセスです。現代の医学や医療を支える基盤を担っていると一言しても過言ではない「査読」。しかし、実はこれまでその大部分は明らかにされてきませんでした。奇しくも、新

型新型コロナウイルス感染症の世界的流行により「査読」の重要性が再認識される一方で、仕組みとしての脆弱性も明らかとなりました。本書は、そんな「査読」にまつわる詳細を、大前特任准教授の専門である臨床疫学・臨床統計に、論文著者・査読者としての豊富な知識、そして臨床医としての長年の経験を組み合わせ、新たな視点と分かりやすい文章で解説します。医療従事者や研究者はもちろん、そうでない方でも楽しく読み進められるよう工夫が凝らされています。さあ、あなたも「査読」を通して医学の発展を支える世界の研究者の一員に！